

四十三、歴史民俗資料室の民具について

『嗚呼　何と沢山のものを手放してしまったのだらうか！』

旧篠栗町と勢門村が合併してはや五十数年。それより昔明治とよばれていた時代から現在の篠栗町になるまでに、この地域で暮らしていた人々が実際に持ち使っていた道具（民具）に私達は篠栗町歴史民俗資料室（以下「資料室」）で再び出会うことができます。長い年月使用した道具にはいろんな人たちの様々な思いがしみこんでいます。

民具とは

民俗学者の渡沢敬三によりつくられたことばで、「民具とは、我々の同胞が日常生活の必要から、技術的に作り出した身辺^{ひきん}の道具」と定義されています。我々の生活に常に密着し、生活していく上で必要

エコ心

日々の生活に用いていた民具について知ることや、お年寄りに昔の暮らしを聞くことは、ただ単に昔を懐かしみ、失ったものの復元や記録をするだけではなく、その民具の本質を知り、作った人、使った人たちの知恵を将来に生かすことだと思います。自然のものは全て自然に還ります。リサイクルやエコロジーという言葉は、現代に出現してきた言葉であり、高度成長期以前の日本では、特に意識されることなく行われていたことなのです。

稻わらは、縄をなつたり編んだりして、わらぞうりやわらかごなど様々な形に姿を変えて用いられました。わらを燃やした灰も、料理の灰汁抜きなどに使われ、無駄にはしませんでした。木や竹もそのものが持つ特性を上手く生かし、多種多様な道具に変化していきました。これらの民具は、たとえ壊れてもすぐに手直しができ生き返ります。木は削れば新しい木肌が現れます。そしてこれら全ての素材は土にもどりまた再生します。無駄なものは一切残りません。

そのほかに失くしたもの

手放したものは形あるものばかりではありません。日本の気候風土に適した醸造の技術（麹、味噌、醤油、酒など）は各家庭のものであり、各家庭そのものの味でもありました。

しかし受け継がれていくべき伝統技術もなくなり、個性あふれた深い味も今では画一化され、お店で製品として陳列されています。

時代の逆行

に迫られ、身邊にある素材を使い、工夫し、加工し、作り出したものを民具と呼びます。

時代の変化と民具

ちよつと考えてみて下さい。自宅にあるものと資料室に展示されている民具の違いを。そう、日常使う道具の大半は昭和三十年代頃からの高度経済成長期を境に急変します。家庭用電化製品の登場や化粧組成されたプラスチック製品が日本人の生活様式や生活環境を一変させてしまいました。この社会現象を受け、日本人の大半が、我れ先とそれまで連綿と培ってきたものを簡単に手放してしまいました。使用されなくなつた道具は、その名前はもちろん、その存在すら忘れられています。